

## 第2版 まえがき

『好きになる生物学』の初版を出したのは2001年でしたから、現在（2012年）はすでに11年が経過しました。初版を書いたのはヒトゲノムの概要が発表されたときで、生物学がますます発展し、人間生活に影響を与えるようになることが予想されました。21世紀は生物学の世紀になるだろうと言われていました。その生物学の現場の空気をできるだけ多くの人に伝えることができればと思います、できるだけやさしく書いたつもりです。

時代が合っていたせいでしょうか、筆者も驚くような反響がありました。何よりうれしかったのは、「生物学って面白いですね」という感想が、10代の若い人から年配の人まで、広い年齢層からたくさん寄せられたことです。そして、何度も増刷を重ねてきました。そのうえ驚いたことに、韓国でも翻訳本が出されました。筆者としては、予想をはるかに超える手応えを得ました。

しかし、生物学の進歩はやはり目覚ましいものがあり、一昨年あたりから、内容が少し古くなっているという声が寄せられるようになりました。たしかにこの間に、ヒトゲノムは完全に解読されましたし、多くの生物のゲノムが解読されました。クローン技術や遺伝子組換え技術も飛躍的に発展しました。そして、遺伝子が同じでも、その働き方が環境などで変わるというエピジェネティクスが発展しつつあります。一方、環境問題でも、地球の環境の悪化を食い止め、生物の多様性を維持し、持続的な開発ができるようにしようという認識が世界共通のものになってきています。

そのような時代の移り変わりのなかで、やはり本書も、必要な改訂をしたいと思うようになったのでした。本書は生物学の基礎を学ぶものですので、最先端のことはそれほど入れる必要はないと思うのですが、合わなくなったところを直し、コラムなどを書き足し、新時代の空気を感じられるようにしました。

この改訂版がどのくらいの間通用するのか、今はわかりません。生物学の進歩は速いですから、これからも驚くような発見や解明があることでしょう。みなさんと一緒に、その進歩や変化を楽しんでいきたいと思っています。

2012年7月

吉田 邦久